

# 恋愛関係嫉妬時の情動とコミュニケーション反応<sup>1)</sup>

—嫉妬の強さおよび性との関連—

和田 実\*

## Emotions and Communicative Responses in Romantic Jealousy: Effects of the Intensity of Jealousy and Gender

Minoru WADA\*

The purpose of this study was to investigate the effects of the intensity of romantic jealousy on the jealousy-related emotions, the communicative responses to jealousy, and the relationships of these emotions and communicative responses. Further, the effects of gender on them were also examined. Four hypotheses were examined. More negative emotions were experienced (H1) and more communicative responses to jealousy were made (H2) in the strong jealousy than in the weak jealousy. The experienced emotions influenced the communicative responses to jealousy (H3). The connection between negative emotions and the communicative responses does not differ with the intensity of jealousy (H4). Participants were 67 males and 102 females. They were presented with two hypothetical scenarios which aroused jealousy. Factor analysis revealed three factors (fear/sadness, anger, and sexual arousal/regret) as the emotion and four factors (accuse/quarrel, signs of possession, confirmation of the partner's reaction, and avoidance/denial) as the communicative responses. H2 and H4 were supported and H1 and H3 were partially supported. Further, some gender differences were found. The effects of the intensity of jealousy and gender are discussed.

**key words:** romantic jealousy, jealousy-related emotion, communicative responses to jealousy, gender differences

### 問題と目的

嫉妬とは、現在あるいは過去の親密なパートナーと他者（第三者）を含む関係によって引き起こされる嫌悪の情動反応である (Bringle & Buunk, 1986)。この関係は、実際のもの、想像上のもの、予期されるもの、あるいは過去に生じたものである (Bringle & Buunk, 1986)。Guero, Andersen, & Afifi (2011) は、嫉妬を恋愛の嫉妬、性の嫉妬、友人嫉妬、家族嫉妬、活動嫉妬、勢力嫉妬、親密さ嫉妬の7種類に分

けている。本研究では、恋愛関係の嫉妬（以下、嫉妬と略す）を扱う。

嫉妬は、恋愛関係にポジティブ、ネガティブ両方の影響をもたらすことが明らかとなっている。嫉妬は、愛情、パートナーへの献身とみられることがある (Guerrero & Andersen, 1998) 一方、嫉妬が強くなりすぎると、浮気、家庭内暴力、離婚にいたることもある (Buss, 2000; Guerrero & Andersen, 1998)。

嫉妬を経験した時には多くの情動が同時に生じることが明らかにされている。Guerrero et al. (2011)

<sup>1)</sup> 本研究は、谷田 朱氏（平成 21 年度名城大学人間学部卒業）の卒業研究（論文タイトル「恋愛関係における嫉妬の強さおよび情動がコミュニケーション反応に及ぼす影響」）にデータを追加したものである。データを提供してくれた谷田 朱氏に謝意を表します。

\* 名城大学人間学部

Faculty of Human Studies, Meijo University, 1-501 Shiogamaguchi, Tempaku-ku, Nagoya 468-8502, Japan

は、嫉妬の中心的な情動は、不安と怒りであり、悲しみ、罪悪感、苦痛、羨みといった嫌悪的な情動が嫉妬をさらに特徴づけるという。また、情熱や愛情が高まるといったポジティブな情動に導く場合もあるという。White & Mullen (1989) は、クラスター分析により、嫉妬時に6種類の情動が生じることを明らかにしている。それらは、怒り、不安、悲哀、羨望、性的覚醒、後悔である。また、嫉妬感情の構造研究を概観した坪田・深田 (1991) は、嫉妬感情として、怒り、悲しみ・抑鬱、恐怖・不安、羨望、性的喚起、罪などをあげている。

これらの情動は、人々が嫉妬をどのように伝え、嫉妬にどのように対処するのかに影響を及ぼす (Guerrero & Andersen, 1998; White & Mullen, 1989)。愛情をより表出したり、その問題を回避しようとしたり、身体的な虐待を加えたりするのである。Guerrero & Andersen (1998) は、嫉妬へのコミュニケーション反応を2つに分けている。それらは相互作用反応 (9種類: 後述) と一般反応 (6種類) である。前者は対面コミュニケーションをとる、もしくは避けることに焦点があり、後者はコミュニケーションをとる価値はあるが必ずしも対面コミュニケーションを含まない行為や行動反応である。

また、Guerrero et al. (2011) は、大きく4つ (それぞれをさらに分類) のコミュニケーション反応があるとしている。それらは、建設的反應 (統合的コミュニケーション、補償的コミュニケーション)、破壊的反應 (ネガティブ・コミュニケーション、暴力的コミュニケーション、対抗嫉妬の惹起)、回避反應 (否認、沈黙)、ライバルに焦点を当てた反應 (所有 (自分のもの) の表示、ライバルの名誉の毀損、監視、ライバルとの接触) である。後述するように、Guerrero & Afifi (1999) は9つに分けている。

さらに、嫉妬時にどのような情動が生じたかによって、その後のコミュニケーション反応が異なる。Guerrero & Afifi (1999) は、嫉妬時の情動経験 (頻度と強さ<sup>2)</sup>) と嫉妬に関連する目的 (関係維持、不確実性の低減、自尊感情の維持などの6つ) が嫉

妬へのコミュニケーション反応に及ぼす影響を調べている。彼女らは、嫉妬へのコミュニケーション反応として、ネガティブ情動表出、分割的コミュニケーション、監視行動、ごまかしの企図、償いによる関係再興、ライバルとの接触、積極的隔絶、統合的コミュニケーション、暴力の9つを用いた。結果によると、嫉妬をしばしば感じる者は、分割的コミュニケーション、積極的隔絶、監視行動をより用いた。また、嫉妬した人のうち強い情動を報告した者は、ネガティブ情動表出、分割的コミュニケーション、監視行動、ライバルとの接触をより用いた。

彼女らの研究は、嫉妬情動の強さと嫉妬コミュニケーションのつながりを確認しているが、特定の情動がどのコミュニケーション反応と関連するのかは調べていない。彼女らは、嫉妬時に抱く情動を分けることなく、嫉妬情動の強さという1つの指標としているからである。そこで、嫉妬時に抱いた各情動とコミュニケーション反応の関連を調べたのが、Guerrero, Trost, & Yoshimura (2005) である。彼女ら (研究2) は、嫉妬時の6種類の情動と11種類のコミュニケーション反応を用いた。そして、暴力的コミュニケーションは敵意の強さと後悔の弱さによって、ライバルとの直接のコミュニケーションは情熱の強さと敵意の強さによって説明されることなどを見出している。

この特定の情動とコミュニケーション行動の関連は、行動傾向 (action tendencies) から説明できるとしている。行動傾向とは、人が情動に対処し、環境に適応するのを助ける生物学に根拠がある行動反応である (Lazarus, 1991)。Lazarus (1991) は、嫉妬に関連させると、怒りの行動傾向は攻撃、不安 (fear) の行動傾向は危害からの回避や逃避、悲しみの行動傾向は喪失感を生み出した人からの解放、罪悪感の行動傾向は損傷からの回復と陳謝である、としている。

しかし、彼女らの研究は、嫉妬のレベルを考慮していない<sup>3)</sup>。現在パートナーがいる者と既婚者を対

<sup>2)</sup> 頻度は、Pfeiffer & Wong (1989) による情動嫉妬尺度を修正したもので、怒り、不安、悲しみなどを経験した頻度を測定する (7項目)。強さは、“嫉妬の気持ちの強さ”と“嫉妬時の強い情動の経験”の2項目からなる。いずれも7件法。

<sup>3)</sup> 関係への脅威の強さの認知は測定されている。そして、関係への脅威の強さの認知が嫉妬時のコミュニケーション反応量と関連しているが、それ以上に同時に生じた各情動がより関連することを明らかにしている。

象に、現在のパートナーとの関係で嫉妬を感じることを思い浮かべて答えてもらっているだけである。また、性差も検討されていない。そこで、本研究では、仮想場面を用いて嫉妬レベルを強弱の2段階に操作し、嫉妬時の情動、嫉妬へのコミュニケーション反応、および両者の関連を調べる。

これまでの検討により、嫉妬の中心的な情動は、怒り、悲しみ、苦痛などの嫌悪的な情動であることが明らかとなった。よって、弱よりも強嫉妬時のほうがこれらの嫌悪的な情動がより強く生じるであろう(仮説1)。また、嫉妬時にさまざまなコミュニケーション反応が生じることが明らかになった。しかも、すでに記したように、嫉妬時に強い情動を報告した者ほど、分割的コミュニケーション、監視行動などをより多く用いることをGuerrero & Afifi (1999)が報告している。よって、弱よりも強嫉妬時のほうがコミュニケーション反応がより多く生じるであろう(仮説2)。

次に、嫉妬時の情動とコミュニケーション反応の関連についてである。特定の情動が特定の反応と結び付く行動傾向(Lazarus, 1991)の存在により、Guerrero et al. (2005)と同様に、生じた情動によってその後のコミュニケーション反応は異なるであろう(仮説3)。そして、嫉妬に関連させたLazarus (1991)による情動と行動傾向の関係に従うと、各情動に対する行動反応は決まっている。したがって、弱よりも強嫉妬時のほうが各情動が強くなり、各コミュニケーション反応が多くなるが、両者の結び付く方向は異ならないであろう(仮説4)。

最後に、嫉妬の性差について検討する。恋愛関係における嫉妬経験の性差に多くの研究が焦点をあててきたが、結果は一貫していない(Aylor & Dainton, 2001)。男性より女性のほうが嫉妬する、女性より男性のほうが嫉妬する、性差がないという結果がそれぞれ報告されている。男性は嫉妬感情そのものを否定する(Buunk, 1982)という報告もある。

嫉妬時に生じる情動の性差も一貫していないが、いくつかの研究は性差を報告している(Guerrero et al., 2011)。女性のほうが苦痛、悲しみ、不安、混乱を経験し、男性のほうが嫉妬感情を否定し、自尊心を維持するのに焦点を合わせる(Guerrero et al., 2011)。女性は関係に焦点を合わせるのに対し、男性は自分の関心に焦点を合わせるからという。ま

た、女性より男性のほうが怒りを感じた(Shettel-Neuber, Bryson, & Young, 1978)という報告もある。

嫉妬へのコミュニケーション反応の性差は、小さいながらも、より一貫している(Guerrero et al., 2011)。男性よりも女性のほうが、統合的コミュニケーション、情動表出、見かけの向上、対抗嫉妬の惹起を用いる(Guerrero et al., 2011)。また、男性は、ライバルとの接触、パートナーを潜在的ライバルに接近させない、パートナーに贈り物を与え、余分なお金を使う(Buss, 1988)。

以上のように、性差に関しては一貫した結果が得られていないので、次のリサーチ・クエスチョンとする：嫉妬時の情動、嫉妬へのコミュニケーション反応、および両者の関連にどのような性差がみられるのか。

## 方 法

### 調査対象者

大学生186名に調査を行い、本人が異性愛者でないと回答した者、無回答が多い者などの17名を除いた。その結果、男性67名、女性102名、計169名を分析対象とした。平均年齢(SD)は男性19.87(0.69)、女性19.78(0.57)で、性差はなかった( $t(167) = .83, ns$ )。調査の実施に際しては、調査への参加は強制されるものではなく、回答するか否かは自由に決めることができることを口頭で伝えた。

### 質問紙の構成

質問紙は、個人的背景要因および2つの嫉妬状況(後述)時の情動とコミュニケーション反応をたずねる項目からなっていた。調査対象者には2つの状況すべてに回答を求めたので、回答順の影響を相殺するために、嫉妬状況の順序をかえた質問紙を2種類作成して実施した。その際、各項目の並び順もかえた。

**個人的背景要因** 最初に、年齢、学年、性についてたずねた。さらなる項目は、倫理的問題に配慮するために質問紙の中程に配置し、あらためて“差し支えなければお答えください”と記した。そこでは、性指向(異性愛者、異性愛者でない)、現在の交際状況(3カ月以上交際中の恋人の有無、交際中の場合にはその関係の満足度と交際期間)、3カ月以上持続した交際経験の有無(有る場合は、具体的回数)をたずねた。

**嫉妬場面** 予備調査<sup>4)</sup>に基づき、強弱の嫉妬を喚起させる場면을以下のようにした。両嫉妬場面とも、“あなたにはつき合って半年になる恋人がいます。そして、あなた達はいつも毎週日曜日はデートすることになっています。恋愛がすべてだと考えるあなたにとっては、恋人と過ごす日曜日が唯一の楽しみであり、いつも日曜日だけは予定を入れないようにしています。しかし、‘来週は予定があるから会えない’と恋人に言われてしまいました。そして、当日、あなたが街中を歩いていると、”で始まり、強嫉妬場面は“恋人があなたよりも容姿が良い男性（回答者が女性の場合、“女性”。以下同様）と一緒に歩いていました。”，弱嫉妬場面として、“恋

人があなたと仲の良い男性（女性）と一緒に歩いていました。”とした。

なお、本調査では、嫉妬レベルの操作の有効性をチェックするために、各仮想状況で、どの程度嫉妬を感じるかを“ほとんど感じない—かなり感じる”の5件法でたずねた。この項目は、嫉妬時の情動項目に加えた。

**嫉妬時の情動** White & Mullen (1989) による6つの情動クラスター（怒り、不安、悲哀、羨望、性的覚醒、後悔）から、クラスター名に最も近い意味を表していると考えられる項目を2項目ずつ選んだ (Table 1)。回答は、それぞれの項目内容を“ほとんど感じない—かなり感じる”の5件法であった。

**嫉妬時のコミュニケーション反応** Guerrero & Andersen (1998) による嫉妬へのコミュニケーション反応のうち、相互作用反応（否定的情動の表出、統合的コミュニケーション、分割的コミュニケーション、積極的隔絶、回避・否認、暴力的コミュニケーション、所有の表示、ライバルの名誉の毀損、関係への脅威）を用いた。各コミュニケーション反応からカテゴリー名に最も近い意味を表していると考えられる項目を3項目ずつ選び、語句を一部修正して用いた (Table 2)。回答は、それぞれの項目内容をどの程度だと思うかについて“ほとんどしない—かなりする”の5件法であった。

<sup>4)</sup> 嫉妬喚起場面を作成するために、大学生10名（男女各5名）に予備調査を行った（平均年齢20.90歳）。具体的場面は本文に記載どおりで、街中を歩いている時に出くわす状況と人物がさまざまにかえられた。それらは、(a) “恋人が〇〇と仲良く手をつないでデートしていました”，(b) “恋人が〇〇と一緒に歩いていました”，(c) “恋人一人で歩いていました”であった。〇〇には、“自分の知っている男性（回答者が女性なら“自分の知っている女性”。以下同様）”，“自分とタイプが似ている男性”，“自分ととても仲の良い男性”，“容姿が良い男性”など8種類の人物が入れられた。各調査対象者は、すべての場面でどの程度嫉妬を感じるかを“ほとんど感じない—とても感じる”の6件法（1~6）で回答した。

場面 (a) はすべてに非常に強い嫉妬を感じ、人物による差異がなかった。場面 (b) の評定平均値は高得点から低得点までばらついた。そこで、平均値が最大の人物 (A)、中央の人物 (B)、および最小の人物 (C) でかつ男女間で平均値に差がない人物を選んだ。それらは、A、B、Cの順に、“あなたよりも容姿が良い男性（女性）”，“あなたと仲の良い男性（女性）”，“女（男）友達”であった（場面 (c) を選ばなかったのは、“二人でいるのを見た”というのを共通にするためである）。そして、性(2)×嫉妬状況(3)の分散分析を行った。嫉妬状況は参加者内要因である。

その結果、嫉妬状況の主効果のみが有意であった ( $F(2,16)=21.09, p<.001$ ; A, B, C順の平均値 (SD): 4.50(1.27), 3.30(1.49), 1.00(0.00))。多重比較 (Bonferroni 法) を行ったところ、CよりB ( $p<.01$ ), A ( $p<.001$ )の方が得点が高かったが、A, B間に有意差はなかった ( $p=.38$ )。しかし、傾向検定の結果、1次傾向が有意であり ( $F(1, 8)=81.67, p<.001$ ), 2次傾向は有意ではなかった ( $F(1, 8)=1.67, ns$ )。すなわち、嫉妬状況と嫉妬を感じる強さの間には直線的な関係があると言うことである。ただし、Cでは嫉妬を感じていないので、本研究では用いなかった。

Table 1 嫉妬時の情動の因子分析結果

	I	II	III
・不安	.95	-.03	-.12
・ゆううつ	.71	.06	-.01
・心配	.63	-.16	.17
・悲しさ	.47	.33	-.12
・情けなさ	.40	-.01	.10
・腹立たしさ	-.03	.89	-.11
・不愉快さ	-.07	.64	.08
・妬ましき	.27	.41	.17
・欲情	-.04	.06	.80
・夢中	-.10	.10	.63
・うらやましき	.12	-.20	.48
・後悔	.30	.05	.43
因子間相関	I	.60	.48
	II		.38

Table 2 嫉妬へのコミュニケーション反応の因子分析結果

	I	II	III	IV
・その話題を何度も持ち出して恋人を責める。	.67	-.07	.22	-.01
・恋人に平手打ちする。	.64	-.01	.06	.02
・恋人を非難する。	.63	-.17	.25	-.05
・お互いに別の恋人を作ろうと言う。	.63	.08	-.31	.08
・恋人とけんかする。	.62	-.13	.18	-.10
・自分も浮気すると言う。	.59	.24	-.26	-.06
・その男性（あなたが女性なら“その女性”）に会うなら別れると言う。	.54	.14	.06	.01
・恋人を脅す。	.38	.16	.06	-.11
・その男性（あなたが女性なら“その女性”）には他に恋人がいると言う。	.04	.68	.05	.15
・その男性（あなたが女性なら“その女性”）の前でキスをする。	.06	.66	-.06	.12
・その男性（あなたが女性なら“その女性”）の前で恋人の腰に手を回す。	.06	.61	-.01	-.10
・自分の恋人だと周囲に紹介する。	.03	.56	.31	.02
・“私たちなら解決できる”と恋人を安心させる。	-.29	.47	.17	-.17
・その男性（あなたが女性なら“その女性”）はいろいろな人に手を出していると言う。	.08	.46	.01	.22
・その男性（あなたが女性なら“その女性”）から引き離す。	.14	.34	.28	-.22
・その場から逃げだす	-.17	-.18	.71	.48
・不安そうに振る舞う。	-.14	.07	.59	-.11
・恋人の前で泣く。	.23	-.06	.54	-.01
・傷ついたように見せる。	.14	.08	.54	-.01
・探りを入れる。	.06	.14	.53	-.02
・嫉妬していることを伝える。	-.06	.15	.51	-.30
・その男性（あなたが女性なら“その女性”）の悪口を言う。	.29	.25	.37	.16
・平気なふりをする。	-.16	.29	-.11	.61
・“嫉妬してない”と自分の感情を否定する	-.08	.20	-.07	.56
・愛情を心におさめて口に出さない。	-.09	.07	.08	.53
・無言で対処する。	.09	-.16	.11	.49
・恋人とのデート回数を減らす。	.35	-.00	-.08	.48
因子間相関	I	.26	.44	-.14
	II		.34	-.29
	III			-.39

## 結 果

### 個人的背景要因

現在交際中の男性 23 名、女性 35 名、非交際中の男性 43 名、女性 67 名であり、男女の割合に差はなかった ( $\chi^2(1)=.01, ns$ )。現在の恋愛相手への満足度 (男性 ( $N=19$ ): 4.58 (1.02), 女性 ( $N=32$ ): 4.56 (1.27),  $t(49)=.05, ns$ ), 交際期間 (男性 ( $N=19$ ): 14.53 (11.92), 女性 ( $N=32$ ): 16.31 (12.24),  $t(49)=.51, ns$ ), 3 カ月以上持続した恋愛経験数 (男性 ( $N=63$ ): 1.89 (1.95), 女性 ( $N=100$ ): 1.77 (1.81),  $t(161)=.40, ns$ ) にも性差はなかった (括弧内の男性、女性に続く数値はそれぞれの平均値 (SD) を表す)。

### 条件操作のチェック

仮想状況でどの程度嫉妬を感じるかの平均値 (SD) は、強、弱嫉妬状況の順に、男性: 4.09 (1.16), 3.70 (1.36), 女性: 4.27 (1.03), 4.00 (1.22) であった。そ

して、性 (2) × 嫉妬レベル (2) の分散分析を行った。嫉妬レベルは参加者内容因である。分散分析の結果、性の主効果 ( $F(1, 167)=2.17, ns$ ) と性 × 嫉妬レベルの交互作用 ( $F(1, 167)=0.42, ns$ ) は有意でなく、嫉妬レベルの主効果のみが有意であった ( $F(1, 167)=14.24, p<.001$ )。すなわち、弱より強嫉妬のほうがより嫉妬を感じていた (強、弱嫉妬順の平均値: 4.18, 3.85)。この結果は、2つの状況で喚起される嫉妬レベルは意図したとおりに異なり、条件操作は適切であったということを示している。

### 尺度の構成

**嫉妬時の情動** 調査対象者全体で、まず強嫉妬状況について因子分析 (主因子法、プロマックス回転) を行った。固有値の減衰状況と因子の解釈のしやすさから 3 因子構造をなしていると判断した (Table 1)。第 I 因子は、不安、悲しさなどに高い負荷がみられたので、“不安・悲哀” 因子と命名した。

第Ⅱ因子は、腹立たしさ、不愉快さなどに高い負荷がみられたので、“怒り”因子と命名した。第Ⅲ因子は、欲情、後悔などに高い負荷がみられたので、“興奮・後悔”因子と命名した。

尺度構成にあたっては、各因子への負荷量が.40以上を基準とした。よって、不安・悲哀5項目、怒り3項目、興奮・後悔4項目からなる。そして、これらの項目得点の単純和を項目数で除したものを尺度得点とした。尺度得点が高いほど、不安・悲哀、怒り、興奮・後悔を感じていることを表す。

次に、弱嫉妬状況についても同様の因子分析を行ったところ、強嫉妬状況と大きな差異は見出されなかった。そこで、嫉妬レベル間の比較が可能なように、強嫉妬状況と同じ項目で同じように尺度構成を行った。

Chronbachの $\alpha$ 係数を強、弱嫉妬状況について算出した。強、弱嫉妬順に、不安・悲哀.77、.85、怒り.73、.84、興奮・後悔.70、.75であった。

**嫉妬時のコミュニケーション反応** 調査対象者全体で、まず強嫉妬状況の因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行った。固有値の減衰状況と因子の解釈のしやすさから4因子構造をなしていると判断した（Table 2）。第Ⅰ因子は、“恋人に平手打ちをする”、“恋人を非難する”などに高い負荷がみられたので、“非難・喧嘩”因子と命名した。第Ⅱ因子は、“その男性（女性）の前でキスをする”、“自分の恋人だと周囲に紹介する”などに高い負荷がみられたので、“所有（自分のもの）の表示”因子と命名した。第Ⅲ因子は、“不安そうに振る舞う”、“傷ついたように見せる”などに高い負荷がみられたので、“相手の反応確認”因子と命名した。第Ⅳ因子は、“平気なふりをする”、“嫉妬していない’”と自分の感情を否定する”などに高い負荷がみられたので、“否認・回避”因子と命名した。

尺度構成にあたっては、各因子への負荷量が.40以上を基準とした。よって、非難・喧嘩7項目、所有6項目、相手の反応確認6項目、否認・回避5項目からなる。そして、これらの項目得点の単純和を項目数で除したものを尺度得点とした。尺度得点が高いほど、非難・喧嘩、所有の表示、相手の反応確認、否認・回避のコミュニケーションをより多くとることを表す。

次に、弱嫉妬状況についても同様の因子分析を

**Table 3** 性、嫉妬レベル別の嫉妬時の情動の平均値 (SD)

	弱嫉妬		強嫉妬	
	男性	女性	男性	女性
不安・悲哀	3.44 (1.01)	3.99 (1.01)	4.04 (0.79)	4.24 (0.78)
怒り	3.80 (1.15)	4.08 (0.99)	4.06 (0.89)	4.24 (0.77)
興奮・後悔	2.43 (1.04)	2.59 (1.06)	2.54 (1.03)	2.66 (0.82)

**Table 4** 性、嫉妬レベル別の嫉妬へのコミュニケーション反応の平均値 (SD)

	弱嫉妬		強嫉妬	
	男性	女性	男性	女性
非難・喧嘩	1.99 (0.85)	2.43 (1.02)	2.40 (0.83)	2.83 (0.89)
所有の表示	1.88 (0.82)	1.90 (0.76)	2.02 (0.77)	1.87 (0.63)
相手の反応確認	2.70 (0.86)	3.38 (0.98)	2.87 (0.83)	3.52 (0.84)
否認・回避	2.77 (0.79)	2.96 (0.86)	3.02 (0.77)	3.02 (0.82)

行ったところ、強嫉妬状況と大きな差異は見出されなかった。そこで、嫉妬レベル間の比較が可能なように、強嫉妬状況と同じ項目で同じように尺度構成を行った。

$\alpha$ 係数を強、弱嫉妬状況について算出した。強、弱嫉妬順に、非難・喧嘩.82、.87、所有.75、.82、相手の反応確認.75、.80、否認・回避.64、.63であった。

#### 性、嫉妬レベルによる嫉妬時の情動とコミュニケーション反応

嫉妬時の情動（Table 3）とコミュニケーション反応（Table 4）の平均値（SD）を性および嫉妬レベル別に示した。そして、これらに性(2)×嫉妬レベル(2)の分散分析を行った。嫉妬レベルは参加者内要因である。

**嫉妬時の情動** 不安・悲哀は、性 ( $F(1, 167) = 9.57, p < .001$ ) と嫉妬レベル ( $F(1, 167) = 32.84, p < .001$ ) の主効果、および性×嫉妬レベルの交互作用が有意であった ( $F(1, 167) = 5.34, p < .05$ )。交互作用について多重比較（Bonferroni法。以下同様）を行ったところ、男女とも、弱より強嫉妬時のほうが得点が高かった（男性：  $p < .001$ 、女性：  $p < .01$ ）。ま

た、弱嫉妬時では、男性よりも女性のほうが得点が高かった ( $p < .001$ ) が、強嫉妬時では男性より女性のほうが得点が高い傾向にあった ( $p < .10$ )。すなわち、弱より強嫉妬時のほうが、男性より女性のほうが、不安・悲哀がより生じていた。

怒りは、嫉妬レベルの主効果が有意であった ( $F(1, 167) = 9.19, p < .01$ )。これは、弱より強嫉妬時のほうが得点が高いことを表している。また、性の主効果が有意な傾向にあった ( $F(1, 167) = 3.06, p < .10$ )。これは、男性より女性のほうが得点が高い傾向にあることを表している。すなわち、弱より強嫉妬時のほうが怒りがより生じ、男性より女性のほうが怒りがより生じる傾向にあった。

興奮・後悔は、いずれにも有意差は得られなかった。

以上のように、嫉妬の強弱による相違が不安・悲哀と怒りで見いだされ、ともに弱よりも強嫉妬時のほうが強く生じていた。ただし、興奮・後悔は嫉妬の強さによる影響はなかった。よって仮説1は一部支持されたと言える。

**嫉妬時のコミュニケーション反応** 非難・喧嘩は、性 ( $F(1, 165) = 10.45, p < .001$ ) と嫉妬レベル ( $F(1, 165) = 62.52, p < .001$ ) の主効果が有意であった。これらは、男性より女性のほうが、弱より強嫉妬時のほうが得点が高いことを表している。すなわち、男性より女性のほうが、弱より強嫉妬時のほうが非難・喧嘩コミュニケーションが多かった。

所有の表示は、性×嫉妬レベルの交互作用が有意であった ( $F(1, 167) = 4.03, p < .05$ )。多重比較を行ったところ、男性は、弱より強嫉妬時のほうが得点が高かった ( $p < .05$ ) が、女性は嫉妬レベルによる差異はなかった。また、弱、強嫉妬時それぞれに性差はなかった。すなわち、女性は嫉妬レベルによる差異はないが、男性は弱より強嫉妬時のほうが所有の表示コミュニケーションが多かった。

相手の反応確認は、性 ( $F(1, 165) = 26.00, p < .001$ ) と嫉妬レベル ( $F(1, 165) = 9.92, p < .01$ ) の主効果が有意であった。これらは、男性より女性のほうが、弱より強嫉妬時のほうが得点が高いことを表している。すなわち、男性より女性のほうが、弱より強嫉妬時のほうが相手の反応確認コミュニケーションが多かった。

否認・回避は、嫉妬レベルの主効果が有意であっ

た ( $F(1, 165) = 8.20, p < .01$ )。これは、弱より強嫉妬時のほうが得点が高いことを表している。また、性×嫉妬レベルの交互作用が有意な傾向にあった ( $F(1, 165) = 3.34, p < .10$ )。有意な傾向ではあったが、交互作用について多重比較を行ったところ、男性は、弱より強嫉妬時のほうが得点が高かった ( $p < .01$ ) が、女性は嫉妬レベルによる差異はなかった。また、弱、強嫉妬時それぞれに性差はなかった。すなわち、女性は嫉妬レベルによる差異はないが、男性は弱より強嫉妬時のほうが否認・回避コミュニケーションが多かった。

以上のように、所有の表示と否認・回避コミュニケーションの強弱嫉妬時の相違は男性で見出されたのみであったが、いずれも弱嫉妬時よりも強嫉妬時のほうが嫉妬へのコミュニケーション反応が多かった。よって、仮説2は支持されたと言える。

#### 嫉妬時の情動とコミュニケーション反応の関連

嫉妬時のコミュニケーション反応を基準変数、嫉妬時の情動を説明変数とした一括投入法による重回帰分析を嫉妬レベル、性別に行った (Table 5)。多重共線性の一つの指標である VIF は、弱嫉妬時の女性の不安・悲哀、怒りはすべてのコミュニケーション反応で2点台 (2.43~2.68) であったが、それ以外はいずれも1点台 (1.13~1.64) であった。

**弱嫉妬時** 非難・喧嘩コミュニケーションは、男性は不安・悲哀の弱さと怒りの強さによって、女性は怒りの強さによって説明された。所有の表示コミュニケーションは、男性のみで、興奮・後悔の強さによって説明された (不安・悲哀の強さは有意な傾向)。相手の反応確認コミュニケーションは、男性は、不安・悲哀の強さ、怒りの強さ、興奮・後悔の強さによって、女性は不安・悲哀の強さによって説明された (女性の怒りの強さは有意な傾向)。否認・回避コミュニケーションはどの情動とも有意な関連はなかった。

**強嫉妬時** 非難・喧嘩コミュニケーションは、男女とも怒りの強さによって説明された。所有の表示コミュニケーションは、女性のみで、興奮・後悔の強さによって説明された (男性も同じ結果であったが、 $R^2$  が有意な傾向にしかすぎなかった)。相手の反応確認コミュニケーションは、女性のみで不安・悲哀の強さと興奮・後悔の強さによって説明された (怒りの強さは有意な傾向)。なお、男性は怒りの強

Table 5 性、嫉妬レベル別のコミュニケーション反応の重回帰分析結果

	男性				女性			
	非難・喧嘩	所有の表示	反応確認	否認・回避	非難・喧嘩	所有の表示	反応確認	否認・回避
弱嫉妬								
不安・悲哀	-.29*	-.25 <sup>†</sup>	.32*	.28 <sup>†</sup>	.09	-.15	.38**	.32 <sup>†</sup>
	(.07)	(-.00)	(.55***)	(.34**)	(.40***)	(.16)	(.60***)	(.10)
怒り	.54***	.24	.27*	.01	.33*	.29 <sup>†</sup>	.22 <sup>†</sup>	-.22
	(.40***)	(.19)	(.53***)	(.23 <sup>†</sup> )	(.45***)	(.25*)	(.56***)	(-.02)
興奮・後悔	.10	.35**	.21*	.17	.12	.16	.12	-.10
	(.02)	(.26*)	(.11)	(.12)	(.38***)	(.20*)	(.42***)	(-.02)
R <sup>2</sup>	.21**	.17**	.40***	.14*	.22***	.08*	.40***	.04
強嫉妬								
不安・悲哀	-.24	.02	.17	-.05	.07	.15	.35***	.14
	(.04)	(.17)	(.40***)	(-.02)	(.33***)	(.23*)	(.55***)	(.05)
怒り	.43**	.02	.25 <sup>†</sup>	.06	.44***	-.08	.17 <sup>†</sup>	-.06
	(.35**)	(.13)	(.41***)	(.03)	(.49***)	(.12)	(.47***)	(-.03)
興奮・後悔	.12	.31*	.22 <sup>†</sup>	-.03	.01	.26*	.23*	-.11
	(.16)	(.33**)	(.38**)	(-.03)	(.22*)	(.30***)	(.46***)	(-.08)
R <sup>2</sup>	.16*	.11 <sup>†</sup>	.26***	.00	.24***	.10*	.36***	.02

注) <sup>†</sup> $p < .10$ , \* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$

数値は、標準化偏回帰係数(単相関係数)を示す。

さ、興奮・後悔の強さが有意な傾向にあった。否認・回避コミュニケーションはどの情動とも有意な関連はなかった。

以上のように、弱および強嫉妬時ともに、否認・回避を除いて、生じた情動によってその後のコミュニケーション反応は異なり、仮説3は一部支持されたと言える。そして、若干の相違はあったが嫉妬レベルによる情動とコミュニケーション反応の結び付き方向は異ならなかった。よって仮説4は支持されたと言える。

## 考 察

### 性、嫉妬レベルによる嫉妬時の情動とコミュニケーション反応

**嫉妬時の情動** 強弱いずれの嫉妬時も、不安・悲哀、怒り、興奮・後悔の3つが見出された。α係数もほぼ満足のいくものであった。White & Mullen (1989) の一部の項目のみを用いたので、6つには分かれなかったが、ほぼ同様の情動が見出されたと言える。Guerrero et al. (2011) によると、嫉妬の中心的な情動は、不安と怒りであり、さらに悲しみ、罪悪感、苦痛、羨みといった嫌悪的な情動が嫉妬を特徴づけるという。また、坪田・深田(1991)は、嫉妬感情として、怒り、悲しみ・抑鬱、恐怖・不安、羨

望、性的喚起、罪などをあげている。本研究の結果においても、これらの情動が見出されており、嫉妬と同時に生じる基本的な情動と言える。

仮説1は、弱よりも強嫉妬時のほうがこれらの嫌悪的な情動がより強く生じる、であった。嫉妬レベルによる相違は、不安・悲哀と怒りで見いだされ、男女ともに弱よりも強嫉妬時のほうが強く生じていた。ただし、興奮・後悔は嫉妬の強さによる影響はなかった。よって仮説1は一部支持された。嫉妬の中心的な情動は、不安と怒りであるので、嫉妬が強いほど不安・悲哀、怒りの情動をより経験するのであろう。深田・坪田(1990)も同様の結果を報告している。彼らは、恋人からの拒否の程度によって嫉妬の強さを操作し、拒否の程度が高くなるほど、怒り、不安が高いことを見出している。

また、これらの情動には性差があり、男性より女性のほうが不安・悲哀と怒りが強く生じていた。条件操作のチェックでは、喚起された嫉妬の強さに性差は見出されていない。したがって、喚起された嫉妬の強さの違いでは説明できない。問題部分で性差に関しては一貫した結果がないことを記したが、本研究の結果は男性より女性のほうが嫉妬時に他の嫌悪的な情動も強く生じており、Guerrero et al. (2011) に一致している。一般に男性は達成、競争、独立を強

調して育てられ、女性は暖かき、親密感、表情の豊かさを強調して育てられる (Sherrod, 1989)。よって、女性は情動表出がより豊かになる。これらの情動表出の性差が現れたのであろう。

**嫉妬時のコミュニケーション反応** 強弱いずれの嫉妬時も、非難・喧嘩、所有の表示、相手の反応確認、否認・回避の4つのコミュニケーション反応が見出された。否認・回避コミュニケーションの $\alpha$ 係数は、.60台と少し低かったが、それ以外は満足のいくものであった。

すでに記したように、嫉妬へのコミュニケーション反応を Guerrero & Andersen (1998) と Guerrero & Afifi (1999) は9種類、Guerrero et al. (2011) は4種類に分けている。3つの研究に共通するのは、ネガティブ情動表出、分割的コミュニケーション (関係破壊行動)、所有の表示、回避・否認である。本研究の結果においても、同様のコミュニケーション行動が見出されている。ただし、相手の反応確認というのはこれまで見出されておらず、日本人特有のものかも知れない。というのは、日本文化の中で嫉妬を表明すること自体抵抗がある (坪田, 2002) ので、直接的な行動ではなく、間接的な行動に訴えて相手の反応を窺うのである。Oetzel, Ting-Toomey, Masumoto, Yokochi, Pan, Takai, & Wilcox (2001) は、対立時の有用な面子の取り繕い (facework) 方が文化によって異なることを明らかにしている。つまり、集団主義文化は面子に関心が高いのである。本結果も、嫉妬への反応の仕方が異なることを示すものであろう。

仮説2は、弱よりも強嫉妬時のほうがコミュニケーション反応がより多く生じる、であった。嫉妬レベルによる相違は、所有の表示と否認・回避コミュニケーションでは男性で見出されたのみであったが、4つのコミュニケーション反応いずれも弱嫉妬時よりも強嫉妬時のほうが多かった。よって、仮説2は支持された。

男女とも、弱より強嫉妬時のほうが非難・喧嘩と相手の反応確認コミュニケーションが多かった。強嫉妬時ほど非難・喧嘩コミュニケーションが多くなるのは、このコミュニケーションは相手を責めることなので妥当な結果であろう。また、強嫉妬時ほど相手の反応確認コミュニケーションも多いが、日本文化の中で嫉妬を表明すること自体抵抗がある (坪

田, 2002) ので、間接的に訴える反応確認も多くなるのであろう。

所有の表示と否認・回避コミュニケーションは、男性のみで、弱より強嫉妬時のほうが多かった。強嫉妬時には自分のものであることを示すと同時に、特に男性は日本文化の中で嫉妬を表明することに抵抗が強い (坪田, 2002) ので、強がって否認・回避するのであろう。和田 (2000) によると、恋愛関係の崩壊に際して、納得していないが別れを受け入れる“消極的受容”が女性より男性のほうが多い。また、恋愛がより進展した段階での関係崩壊は、女性より男性のほうが回避・逃避行動が多い。ここには性役割期待が関連している (和田, 2000) のであろう。男性は“男らしさ”という性役割に強く縛られているので、面子の取り繕い方が女性とは異なるのであろう。Dosser, Balswick, & Halverson (1983) が悲しみの経験や表出は男性より女性に多いことを見出しているように、男性は素直に情動を表出できないからであろう。

また、これらのコミュニケーション反応には性差があり、男性より女性のほうが非難・喧嘩と相手の反応確認コミュニケーションが多かった。男性より女性のほうがよりしばしばネガティブ戦略を用いるという Aylor & Danitton (2001) と一致していると言えよう。女性のほうがストレートに感情を表出するのが許されるからであろう。女性は関係そのものに焦点を合わせる (Guerrero et al., 2011) のに対し、男性は、ライバルとの接触、パートナーを潜在的ライバルに接近させない (Buss, 1988)。男性はパートナーではなく、ライバルに目を向けるのであろう。

#### 嫉妬時の情動とコミュニケーション反応の関連

仮説3は、生じた情動によってその後のコミュニケーション反応は異なる、であり、仮説4は、情動とコミュニケーション反応の結び付き方向は嫉妬レベルによって異なる、であった。弱および強嫉妬時ともに、否認・回避を除いて、生じた情動によってその後のコミュニケーション反応は異なり、仮説3は一部支持された。また、若干の相違はあったが嫉妬レベルによる情動とコミュニケーション反応の結び付き方向は異ならなかった。よって仮説4は支持された。これらは、Lazarus (1991) のいう嫉妬時の情動と行動傾向の関連から説明される。特定の情動が特定の反応と結びついており、そのために

嫉妬レベルが高い場合は低い場合よりも、各情動が強くなり、各コミュニケーション反応が多くなるが、結び付く方向は異ならないのであろう。

非難・喧嘩コミュニケーションは、弱嫉妬時では、男性は不安・悲哀の弱さと怒りの強さ、女性は怒りの強さによって、強嫉妬時では、男女とも、怒りの強さで説明された。怒りがより生じた者ほど相手を責める非難・喧嘩コミュニケーションをとるとするのは妥当であろう。Guerrero et al. (2005) は、攻撃的コミュニケーションが敵意の強さ（と自責の欠如）によって説明されることを明らかにしており、同様の結果と言える。ネガティブ情動を強く感じると、攻撃的なコミュニケーション形態をとってネガティブさを表現するのである (Guerrero & Afifi, 1999)。

しかし、弱嫉妬時の男性で、不安・悲哀の強さが非難・喧嘩コミュニケーションを少なくしていた（有意ではないが、強嫉妬時の不安・悲哀の標準化偏回帰係数の値も弱嫉妬時と同程度の負の値である）。すでに述べたように、男性の面子の取り繕い方は女性とは異なるので、不安が生じてもパートナーへの直接的な行動に出ることなく、間接的な行動（反応確認など）に出るということであろう。また、ライバルが自分と仲の良い男性という要因が影響している可能性がある。ライバルが親密な友達なら最大の裏切りを感じる (Shackelford & Buss, 1996) からである。すなわち、仮想状況に嫉妬以外の要因が加わっている可能性がある。

所有の表示コミュニケーションは、弱嫉妬時では、男性のみで、興奮・後悔の強さによって、強嫉妬時では、男女とも興奮・後悔の強さによって説明された（男性の  $R^2$  は有意な傾向）。興奮・後悔した者ほど、自分のものであることを示すコミュニケーションをとるのであるから妥当な結果であろう。

相手の反応確認コミュニケーションは、弱嫉妬時では、男性は、不安・悲哀の強さ、怒りの強さ、および興奮・後悔の強さによって、女性は、不安・悲哀の強さによって説明された。強嫉妬時では、女性のみで、不安・悲哀の強さと興奮・後悔の強さで説明された。不安は相手の情報を求める (Guerrero et al., 2005)。相手を失う不安が強い者ほど、相手の反応を確認するということであろう。不安・悲哀は男性より女性のほうが強く生じていた。よって、女性

は嫉妬の強さに関わらず相手の反応確認コミュニケーションと関連したのであろう。後悔している者ほど相手の反応を確認するのは、元の状態に戻りたいからであろう。

否認・回避コミュニケーションは有意な関連が見出されなかった。しかし、Guerrero et al. (2005) は、いらいと自責によって説明されることを明らかにしている。今後あらためて検討する必要があるであろう。

### 本研究の問題点と今後の課題

第一に、嫉妬時に生じる情動としてポジティブ情動を含めていない点である。嫉妬にはポジティブ効果があることも明らかになっているので、ポジティブ情動を加えて調べる必要があるであろう。第二に、嫉妬時に抱いた情動だけでなく、関係をどうしたいと思ったのか（目的）によって、嫉妬へのコミュニケーション反応が変わることが予想される。したがって、この目的という要因を組み込んで検討する必要があるであろう。第三に、ジェンダー、愛着スタイルといった個人的特徴との関連を調べることである。実際、Aylor & Dainton (2001) は性とジェンダーの両方を用いると嫉妬表出をうまく説明できることを明らかにしている。最後に、本研究は嫉妬時の自分の情動とコミュニケーション反応を調べたが、嫉妬を表出したときのパートナーのコミュニケーション反応を調べることである。

### 引用文献

- Aylor, B., & Dainton, M. 2001 Antecedents in romantic jealousy experience, expression, and goals. *Western Journal of Communication*, **65**, 370–391.
- Bingle, R. G., & Buunk, B. 1986 Examining the causes and consequences of jealousy: Some recent findings and issues. In Gilmour, R. & Duck, S. (Eds.), *The Emerging Field of Personal Relationships*. Hillsdale, NJ: Erlbaum. pp. 225–240.
- Buss, D. M. 1988 From vigilance to violence: Tactics of mate retention in American undergraduates. *Ethology and Sociobiology*, **9**, 291–317.
- Buss, D. M. 2000 *The Dangerous Passion: Why Jealousy is as Necessary as Love and Sex*. New York: the Free Press.
- Buunk, B. 1982 Strategies of jealousy: Styles of coping with extramarital involvement of the spouse. *Family Relations*, **31**, 13–18.
- Dosser, D. A., Balswick, J. O., & Halverson, C. F. 1983 Situational context of emotional expressiveness. *Journal of Counseling Psychology*, **30**, 375–387.

- 深田博巳・坪田雄二 1990 恋愛関係における嫉妬の研究  
広島大学教育学部紀要 (第1部), **38**, 207-211.
- Guerrero, L. K., & Afifi, W. A. 1999 Toward a goal-oriented approach for understanding communicative responses to jealousy. *Western Journal of Communication*, **63**, 216-248.
- Guerrero, L. K., & Andersen, P. A. 1998 Jealousy experience and expression in romantic relationships. In Andersen, P. A., & Guerrero, L. K. (Eds.), *Handbook of Communication and Emotion*. New York: Academic Press, pp. 155-188.
- Guerrero, L. K., Andersen, P. A., & Afifi, W. A. 2011 *Close Encounters*. 3rd ed. Thousand Oaks CA: Sage, pp. 310-315.
- Guerrero, L. K., Trost, M. R., & Yoshimura, S. M. 2005 Romantic jealousy: Emotions and communicative responses. *Personal Relationships*, **12**, 233-252.
- Lazarus, R. S. 1991 *Emotion and Adaptation*. New York: Oxford University Press.
- Oetzel, J., Ting-Toomey, S., Masumoto, T., Yokochi, Y., Pan, X., Takai, J., & Wilcox, R. 2001 Face and facework in conflict: A cross-cultural comparison of China, Germany, Japan, and the United States. *Communication Monographs*, **68**, 235-258.
- Pfeiffer, S. M., & Wong, P. T. P. 1989 Multidimensional jealousy. *Journal of Social and Personal Relationships*, **6**, 181-196.
- Sherrod, D. 1989 The influence of gender on same-sex friendships. In Hendrick, C. (Ed.), *Close Relationships*. Newbury Park, CA.: Sage, pp. 164-186.
- Shackelford, T. K., & Buss, D. M. 1996 Betrayal in mateships, friendships, and coalitions. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **22**, 1151-1164.
- Shettel-Neuber, J., Bryson, J. B., & Young, L. E. 1978 Physical attractiveness of the "other person" and jealousy. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **4**, 612-615.
- 坪田雄二・深田博巳 1991 嫉妬感情に関する実証的研究の動向 広島大学教育学部紀要 (第1部), **39**, 167-173.
- 坪田雄二 2002 自尊感情と嫉妬の関連性 広島県立大学論集, **6**, 1-10.
- 和田 実 2000 大学生の恋愛関係崩壊時の対処行動と感情および関係崩壊後の行動的反応—性差と恋愛関係進展度からの検討— 実験社会心理学研究, **40**, 38-49.
- White, G. L., & Mullen, P. E. 1989 *Jealousy: Theory, research, and clinical strategies*. New York: Guilford Press.

(受稿：2013.10.28; 受理：2014.7.22)